

三つ子の魂

帯広市医師会
協立病院

さとう ゆきひろ
佐藤 幸宏

かれこれ50年も前のことですが、大学3年の解剖学の組織学実習の時でした。時間内にたくさんの組織のスライドを見なければならなかったので、必ず実習前にテキストを確認してみるべきものをチェックして臨みました。普段見ることのない微細な構造がピンクとブルーの濃淡に染められて美しくもあり、テキストには的確にその特徴が指摘され生理学的意味も付加されて、生命の緻密さと神秘と先人達の偉業に感動しながら実習をこなしました。

脳の白質の表面構造を見たときだったと思います。同じような細胞で視野一面が埋め尽くされていて、テキストによるとこれが6層構造に分けられるということです。粘膜の4層構造など誰が見てもなるほどというような理解しやすい代物ではなく、テキストには細胞の特徴や層の区別の方法など書いてありますが、なんぼ見てもそうは見えません。見えたふりをするのも自分を偽った気がするので、ちょうど巡回してきた教授に「どう見たら6層に分けられますか？」と質問したところ、教授は「自分が見たものが真実なんだよ。6層に見えるというのは人がそう見えたからそう言っているだけで、目の前に見えるのが真実だと思い切る自分を信じる信念こそが大切なんだよ」と言って行ってしまった。

何周か回った後教授は私の席にまた戻ってきて「そうはいっても、6層だと言った人の根拠になる研究や過程や考え方もある訳だから、なぜそう言ったのかそちらに注意を払う必要もあるんだよ」と言ってまた行ってしまった。

組織学の勉強よりも何だか、医師として育つ時の基本的な所で何かを教わったような気になって、今もあの時のやり取りは記憶に残っている。

釈迦に説法かもしれませんが、複合性局所疼痛症候群（CRPS）は、正常人には理解しがたい痛みや苦痛が生じ、現状の解剖学、生理学では説明の難しい複雑な病態であること、治癒を担保できる確定的治療法が確立されていないことなどの厄介な病態でその診断治療はなかなか難しいものがあります。

国際疼痛学会（IASP）によって下記の2タイプに分けられています

タイプⅠ（RSD）：反射性交感神経性ジストロフィー～明確な神経損傷がないのに発症し難治性の疼痛を訴えるもの。

タイプⅡ（カウザルギー）：～創傷、脱臼、骨折などによって神経損傷が発生して難治性の疼痛を訴えるもの。

上腕骨骨折で約3年間の治療が成されて、結局最

終的にCRPSの診断が下った若い女性の患者さんがいました。骨折はしっかりと髓内釘で固定され骨癒合も良好でしたので初診医では1年半の治療の後、骨折後神経障害の診断で症状固定となり後遺障害が認定されました。しびれ痛みが続いていた患者は2件目の病院に行き治療の継続を希望し治療を受けましたが、しびれ痛みは続き最終的にCRPSの診断の下症状固定になり2度目の後遺障害が再認定されました。

患者は2回目の後遺障害をもとに民事訴訟を起こし損害賠償請求が発生しました。これをめぐって被告からCRPSの診断に疑義が出され、CRPSの診断根拠が論議されました。

異なった後遺障害等級が2度認定されたことから、債務者から賠償請求額を巡ってその解釈に争いが生じた訳です。

争いの争点となったのはCRPSと診断した医師の意見でした。

肩、上前腕、手首、手指の激しい痛みは橈骨神経単独障害の場合の範囲を超えた強い難治の痛みのように、橈骨神経のみに原因を局限して説明のつくものではないが、だからといってそれは橈骨神経損傷によるものではないとも言いきれません。故を以ってtypeⅠ、typeⅡのどちらにも当てはまることの診断理由を述べたのです。認定機関から認定理由を明確にするためにはtype分けする必要があるためtypeⅠですかtypeⅡですか？と二度の照会がありましたが、主治医は頑として2回ともtypeⅠ、typeⅡのどちらにも当てはまると回答したのです。案の定被告からは「typeⅠとtypeⅡが競合することはあり得ないことであって、主治医の診断どおりとするなら医学的には認定不能な筈」との反論が出されました。

歳ばっかりとって、だんだん何もできなくなっていく身ですが、公的な立場で意見を求められることも度々あって、今回の事例についても意見を求められました。

幸い、「最近の研究では、症状で分類するとこの2つの病態は区別ができないこと、神経損傷の有無を明確に判断できるバイオマーカーがないことから、神経損傷の有無で分類することに対して否定的な意見も存在しています」という記述に巡り合うことができ、そういう考え方もできるとの意見を回答することができたのですが、その後の行方がどうなったかは不明です。

ただ、ここで話したかったことは、大学3年の組織学実習で聞かされた教授の一声が、この度の主治医のかたくな態度と重なって、「自分の見たものを信じて信念をもって述べることは、やっぱり結果どうであっても後悔しないし、すがすがしい気持ちでいられるよナ」と、時を超えてあの時を思い出しました。という話でした。

三つ子の魂百までもというところでしょうか。